

沼津市若山牧水記念館

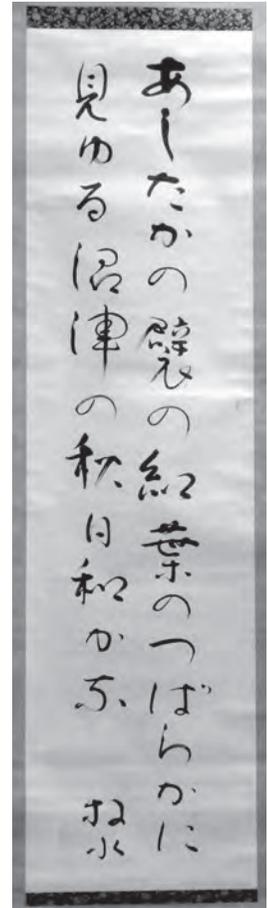
第59号 平成29年9月15日

編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

「半折頒布会」の当初の頃の作品のように思える。
牧水が東京から沼津の上香貫折坂に家を借りて移住したのが大正九年八月十五日。その借家を出て、沼津に定住するための住宅を兼ねた「創作」の編集発行所を建築する費用を捻出することを目的に、短冊や色紙半折を頒布する会を発足させたのが大正十一年七月十日。その会の規定には、短冊参円、色紙四円、半折五円とある。価格は何度か改定されているが、面白いのは、規定の中に「本会を終るまで本会以外の揮毫は一切謝絶します」とあること。それだけの覚悟をもって短冊色紙半折の「頒布会」をはじめたとも言えよう。

あしたかの襲の紅葉のつばらかに 見ゆる沼津の秋日和かな 牧水

掲示の半折は、沼津市生れで、本会の発足時からの会員の株式会社富士経済の会長だった阿部英雄様が大切に所蔵されていたもので、阿部様のご遺族敬子夫人から寄贈された牧水の半折四本のうちの一本です。きちつと正座して、すこし緊張している中で書かれたように感じた。すなわち、「半折頒布会」の当初の頃の作品のように思える。



低山の香貫に登り真上なるそびゆる富士を見つつ時
経ぬ

の三首を詠んだ後に、眼前にそびえる愛鷹山と富士や周辺の事物を一気に詠みくだった大作の中の一首である。

駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣なせる愛鷹の山
わが門のまへをながるる小流に散りうかぶ葉のやう

やく繁し
わが門にならぶ桜のうすもみち久しと見つけいまは
散りたり

桑の木老いて枝張るこずゑより啼きてとびたつ類
白の鳥

ときは樹は遠きに光り柿紅葉やはらかなれや窓のひ
なたに

などの秀作の中から「あしたかの襲の紅葉」の歌を選び、
丁寧な筆をおろす牧水の内に、故郷の尾鈴山の姿が浮かんで
はいないか、などと思いめぐらしたりする。(須永秀生)

ところで、この歌は、沼津に移住した直後の大正九年の作である。歌集『くろ土』に載せられた「香貫山」と題する著名な

海見ると登る香貫の低山の小松が原ゆ
富士のよく見ゆ

香貫山いただきに来て吾子とあそび久
しく居れば富士晴れにけり

恋と青春が新しかった時代

梅内美華子

ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔
ひながら死せ果てよいま
接吻くるわれらがまへに涯もなう海ひ
らけたり神よいつこに
山を見よ山に日は照る海を見よ海に日
は照るいざ唇を君
くちづけは永かりしかなあめつちにか
へり来てまた黒髪を見る

近代短歌で恋の歌、なかでもキスの歌の中で思い出されるのが右の牧水の歌である。大胆で鮮烈な印象を与える。「唇」「接吻」が恋そのものであり、恋の陶酔に若い青年の心身が燃えている。海を前にした解放感のなかで全開するような恋のロマン。

これらの歌の背景を確認のために記しておくと、明治四十年の歳末から四十一年早春にかけて、牧水は恋人園田小枝子を伴って千葉房総半島の南端根本海岸に二週間ほど滞在したおりの歌である。牧水二十三歳、小枝子は一つ年上であった。牧水が早稲田大学の夏休みに帰省の途中立ち寄った神戸で明治三十九

年に出会っている。その後小枝子は上京し、友人の紹介状をもって牧水の下宿を訪ねたという。それから二人の恋愛は始まるが、牧水は小枝子が人妻であることをまだ知らなかった。

歌は明治四十一年の発表、歌集『海の声』に所収された。のちに編まれた歌集『別離』には

女ありき、われと共に安房の渚に渡り
ぬ、われその傍らにありて夜も昼も断
えず歌ふ、明治四十年早春

という詞書が付されている。新しい歌集の編集で意図的に設定を変えたものか。『別離』は明治四十三年に東雲堂書店発行。先の『海の声』と第二歌集『独り歌へる』の二歌集に百三十首の新作を加えたものである。

「ああ接吻」の歌は歌いだしからして大きい。海の上を渡る太陽の光、空を舞っている鳥も諸共にわたしたち二人の世界のものとする。「死せ果てよいま」の結句の命令形も強く響き恍惚として刹那を永遠に閉じ込めようとしたものだ。

「接吻くる」の歌では海をさらに拡大するの
が「神」という観念。この「神」は私たちの
恋愛を見守り行く末を知っている「神」で
あろうか。どこにいらつしやるのかと思うま
で海は「涯もなう」広がる。

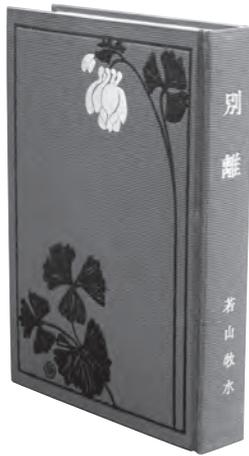
「山を見よ」の歌は、畳み掛けるリズムが
恋の高揚感を伝える。かつて塚本邦雄は「こ
のダイナミックな畳みかけは正にたかぶつた
男の吐息そのものだ」（この夜星降れ 若山牧
水私論）と評した。対句を一首の中に用いて、
こまかくリズムを刻む。結句「いざ唇を君」
はびっくりするフレーズだ。現代の口語の感
覚からすると大仰な感じがする。「さあキス
をしよう」のことだが、「いざ」がいかにも
近代の響きである。ここが頂点というかのよ
うな恋の熱情を表現している。

「くちづけは」の歌は、その時間が長く感
じられたことを、「あめつち」天上から地上に、
現実に戻ってきたようだと大きな喩えで表し
ている。時間の喩えにスケールがあり、ロマ
ンを大きく描く。恋人は黒髪として描かれ、
目の前に確かにいることを認める。長いキス
を終えたあとの恍惚から女性の艶やかな黒髪
へと円環をたどるようである。

これらの歌について、伊藤一彦と俳優の堺
雅人の対談集『ぼく、牧水！』（平成二十二年



若山牧水『海の声』



若山牧水『別離』

角川書店)での言及がある。堺が現代の感覚で感想を素直に述べている点に共感を覚えた。少し長くなるが引いてみよう。

堺 この時代にはこんな男の恋愛歌はほかにないんでしょう？ (中略) キスしながら「世界よ、生まれ」でもんね。海に、太陽に、鳥に命令してる(笑)。二首目もすごい。真

昼の、大自然のなかのキス。「いざ唇を、君」なんて、セリフでも言ったことないです、僕(笑)。これっていわゆる「明星」風の短歌ですか？ ロマンあふれる？

伊藤 違います。いかにも作者の顔が見える歌で、肉声が聞こえるでしょう。それって「明星」とは一線を画した歌ですね。

堺 はい。セリフのように聞こえてきます。よく分からないけれど、「肉声を感じる歌」を作るのって難しいんでしょう？

伊藤 現実感を感じさせる言葉とリズムが大事です。そして内容からすると、今まで見たことのないような、赤裸々に自己を表現した歌、特に男は強くなければならないとかの建前と違う、自分を女の前に投げ出しているところが新鮮だったのです。

堺は牧水の「接吻」の歌の独自性に着目しながら、「明星」風かと伊藤に聞いている。伊藤は「肉声が聞こえる」歌として、与謝野晶子に代表される「明星」風とは異なるものだとする。そして「今まで見たことのないような、赤裸々に自己を表現」、「自分を女の前に投げ出しているところが新鮮だった」という見解を述べている。浪漫性という読者が第一に感受する印象、それも現代の読者が「こ

んな感じ？」と大まかにしかイメージできないところを、牧水短歌の個性、独自性に分け入って解説したものだといえる。

「くちづけ」がうたわれた作品を振り返ってみよう。短歌も新しい時代に入った明治に恋愛の歌が多く作られたが、恋の象徴として「くちづけ」「接吻」の性的な用語も詠みこまれるようになっていった。

病みませるうなじに織きかひな捲きて
熱にかわる御口を吸はむ

(与謝野晶子『みだれ髪』明治三十四年)

明治三十三年、新詩社の与謝野鉄幹が大阪を訪れ、すでに「明星」に投稿していた晶子、山川登美子と初めて面会した。三人は歌会などで親しみ急速に心を寄せ合うようになる。鉄幹二十七歳、晶子二十二歳、登美子二十一歳であった。東京に戻ってから鉄幹は発熱。そのことを知った晶子はこの歌を詠んだという。「織きかひな」は晶子の女性の腕。私が寄り添って介抱したいという歌である。熱に苦しんでいる渴いた口と相手の肉体の状況を想像し、結句の「御口を吸はむ」の密着が性的で大胆である。歌の師という師弟関係、初めて面会からあまり日が経っていないこと

などを考えると、あまりに激しく性急な歌に思われるが、それは野暮であろうか。晶子の中ですでに師を超えて一人の男性への愛に変わっていることがうかがわれる。

「御口を吸はむ」は、くちづけのこと。「口吸う」という言い方は室町期の文献に見られると言われ、その後江戸時代の草子では性愛表現として用いられていた。江戸時代の「口吸う」が性愛そのもの、あるいは放埒な性を連想させるものであったのに対し、明治以降の文学表現においては西欧文化の流入の影響のもと、愛情の表現、自らの愛の厳肅な証としての意味をもつようになった。晶子の歌では前時代からの伝統的な表現を用いながら、性を帯びつつ、恋によって自己を遂げようとする意思が濃密に表れる。

根なし言ことばまたも空笑そらあはれこの憎き口よと云
ひて吸ひにけるかな

(与謝野寛『相聞』明治四十三年)

さかしまにもゆる火中はなかを落ちながら互あひまに
抱かかりてくちづけぞする

寛(鉄幹から改名)の歌は、山川登美子への挽歌に続いているもので、二人の関係について想像をかきたてる。登美子は明治四十二年四月に亡くなった。死の近い登美子を抱擁し、

「さかしまにもゆる火中を落ち」るのはタブーを破って地獄に落ちる覚悟である。晶子との三角関係の均衡を揺るがす、切迫した命の逆りがここにはある。牧水の歌のピークとは反対側にあるタブーを帯びたピークであり、非常にドラマティックである。

君が唇くちのなかにのみゆるほどあかり
し夜の強きくちづけ

(前田夕暮『収穫』明治四十三年)

やや長きキスを交かはして別わかれ来きし

深夜の街の

遠き火事かな

(石川啄木『一握の砂』明治四十三年)

与謝野寛『相聞』、牧水『別離』と同年に刊行された歌集から「くちづけ」の歌を引く。夕暮の歌も情熱的である。夜の闇でもあきらかに見えたように思えるほど恋人の唇が「あかりし」と色あいをうたっている。そこに恋愛のさなかに発見したものがあり作品の独自性となっている。啄木は英語の「キス」を用いていて都会風の洒落た趣をもっている。釧路で出会った芸妓「小奴」が、東京に戻った啄木を訪ねてきて、あちこち案内して歩いたことが明治四十一年十二月の日記にある。彼女を宿に送ったときの別れ際の「キス」で

あるようだ。外来語の雰囲気にもよるだろうが、やや軽い、遊びの気分が漂う。そして晶子、牧水の「くちづけ」とは異なるもの、まといはじめている。

くさばなのあかきふかみにおさへあへぬ
くちづけのおとのたへがたきかな

(北原白秋『桐の花』大正二年)

全部ひらがなで書かれたことにより意味性から逃れ、暗号のような趣がある歌。音律の底からしだいに濃密な雰囲気が入ってくるようだ。「おさへあへぬ」「たへがたきかな」の感情もひらがな表記によってやさしい吐息を想像させる。独特なのは「くちづけのおと」。恋と若い肉体の発見がある。恋の燃焼に命の切なさを感じ取っている。

醒めはてし男の口を吸はむよりのくち
なはの舌を吸はまし

(原 阿佐緒『涙痕』大正二年)

「くちなはの舌」蛇の舌を吸おうという対比が常軌を逸したもので、絶望の深さを伝える。男を憎みつつもなお口づけを思うところは妖しく暗い。「吸はむより」「吸はまし」は心の位相を激しく裏返したものだ。阿佐緒は宮城県に生まれ、成長してからは画家を目指

して上京した。日本女子美術学校に入学し、そこで教師の小原要逸と恋愛関係になる。小原に妻子があることを後から知った嘆きが歌の背景にあるか。この「くちづけ」は愛の証ではなく己の存在証明となっている。

次に現代短歌を見てみよう。宮柊二、近藤芳美の歌になると、時代の抑圧的な制度や空気に自己を守りつつ抒情を遂げようとしている。

接吻をかなしく了へしものづかれ八つ
手団花に息吐きにけり

(宮 柊二『群鴉』昭和二十一年)

手を垂れてキスを待ち居し表情の幼きを恋ひ別れ来りぬ

(近藤芳美『早春歌』昭和二十三年)

戦後に登場した中城ふみ子は癌を患い死の怖れに立ち向かう自己の燃焼が恋の歌に表れる。

灼きつくす口づけさへも目をあけてうけたる我をかなしみ給へ

(中城ふみ子『乳房喪失』昭和二十九年)

背のびして唇づけ返す春の夜のころはあはれみづみづとして

華麗な表現ながら陶酔感は淡い。恋人と一体化できない自身を冷静に見つめつつ、身体と言葉によって自己を開花しようという希求が底にはある。そして受身に終わらないことで女性の新しい立脚点にもつながるものが「くちづけ」を媒介としてうたわれている。戦後を経過し日本が豊かになってきた時代から今にいたるまでの歌をあげる。

泉のようにくちづけけている しばらくは
せめて裡なる闇繋ぐため

(永田和宏『メビウスの地平』昭和五十年)

電子音にひと日まみれて来し君が言葉な
くながきくちづけをくれぬ

(米川千嘉子『夏空の糧』昭和六十三年)

午後。唇といふうすき粘膜にてやはく他人の顔とつながる

(辰巳泰子『紅い花』平成元年)

水蜜桃の汁吸うごとく愛されて前世も我は女と思う

(俄 万智『チヨコレート革命』平成九年)

カーテンに遮光の重さ くちづけを終えてくずれた雲を見ている

(大森静佳『てのひらを燃やす』平成二十五年)

恋愛、性を客観的知的に捉えた静かで落ち着いた美、イメージ豊かな多様な比喻が一首

の奥行きを深くしている。しかしながら牧水や晶子の歌にあつた濃密な自己や恋を大きく捉えた歌から遠くなったこともうかがえる。複雑な心理や関係性への問い掛けなどが洗練された表現を生み出しているが、どこか恋愛や性が生き難さ、生の重さにつながるようなところも見られる。

恋愛観やモラルは時代によって変化し、それが短歌表現にも表れてきた。今は情報過多の複雑な時代、恋を通して人間としてこの世に生まれ出た悲喜をどれくらい歌っていくことができるだろうか。



【筆者プロフィール】 うめない みかこ

昭和四十五年、青森生れ。同志社大学文学部卒。同六十二年、「歌林の会」に入会。現在、「かりん」編集委員。平成三年「横断歩道（セブラ・ゾーン）」五十首で第三十七回角川短歌賞、平成十二年「若月祭」で第一回現代短歌新人賞、同二十四年「エクウス」で芸術選奨新人賞、第八回葛原妙子賞、「あぢさるの夜」二十首で第四十八回短歌研究賞をそれぞれ受賞。そのほかの歌集に『横断歩道（セブラ・ゾーン）』『火太郎』『夏羽』『真珠層』。歌書に『現代歌枕 歌が生まれる場所』『ここからはじめる短歌』がある。平成二十九年三月に開催した第二十九回「雛の歌会」の講師。

牧水の旅―沼津の二つの宝

榎本 篁子
(沼津市若山牧水記念館館長)



「幾山河」の歌碑
(献酒する榎本篁子館長)

沼津には、「牧水の旅」の象徴ともいえる二つの宝がある。一つは、牧水歌碑第一号の千本松原に建つ「幾山河」の歌碑、そしてあと一つが沼津市若山牧水記念館に展示される牧水自筆のボードレールの詩の短冊である。

いずれも、若山牧水が早稲田大学在学中歌人としてスタートするきっかけとなった牧水の原点、「牧水の旅」の核に由来するエピソードなのである。

平成二十九年は、牧水が「幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」の歌を詠んで百十年となる。

詠んだ場所は、岡山県新見市哲西町二本松峠とされ、牧水・喜志子旅人の歌碑がある。

平成十九年には、「幾山河」と同時に詠んだ「けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつづあくがれてゆく」の歌碑が、百年を記念して、榎本の揮毫で建立された。

私にとって、祖父牧水の「幾山河」は、物心つく前から日常の中にあつたものだが、それは格別であつた。目からよりも耳から入つた記憶といえる。「いくやまかは」にはじまり「旅ゆく」で終わる歌に、母の名「いく子」から父「旅人」までを詠んだものと思つていたのは何時頃だつたか。向田邦子の「眠る盃（めぐる盃）」ではないが、子供にのみ許される解釈をしていたわけである。

父は大正二年四月二十四日、歌人若山牧水・喜志子の長男として、喜志子の実家信州にて誕生した。

折しも牧水は、故郷宮崎県日向の父親立蔵の病氣のため帰郷しており、故郷に残るべきか否かのいわゆる牧水「みなかみ時代」の苦悩の中にいての長男誕生であつた。

牧水には、旅人・岬子・真木子・富士人の四人の子供がある。岬子と富士人は、それぞれ生まれた土地に結びつく発想からその名が生まれていて、その時の牧水は、たとえ貧しくとも心は静かで、平明な境地にあつた時であり、旅人や真木子は、揺れ動く愁いの日々からの所産であつたことで、牧水が心に求めた象徴がそうした命名の中に無意識に秘められていたのではないかと父は己の名「旅人」について述べている。

十五歳で父親牧水と別れ、平成十年八十四歳で他界した旅人は、牧水からは離れようにも離れられない生涯を送つた。牧水の持つさびしさ、かなしさ、やさしさを抜き難く持つていた旅人は、晩年になるほど牧水の本质に對する、その求めたものに対する共感を強くしていったのではなからうか。

その中の折にふれての「幾山河」の話題は、すなわち牧水の旅を、初恋を、自然への思いを語ることであつた。

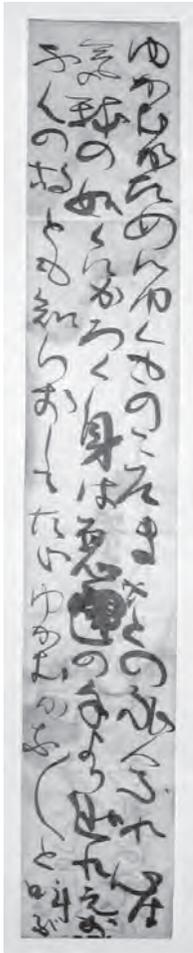
「幾山河」の歌は、父にも、また私にとつても、心の原点、源なのである。

約百年前の明治四十三年、牧水は理想を持って短歌誌『創作』を創刊。今年で一〇四巻を迎えた。それは百年という「時」を記録した資料であり、関わってきた牧水関係者にとつては身近な歴史書ともいえる。

その創刊号は北原白秋、窪田空穂、土岐善麿、金子薫園、相馬御風、後に表紙を描いた中川一政など錚々たる人々が名を連ね、海外のツルゲーネフ、ニーチェ、カールブツセ、ボードレル等の評論も盛んに取り上げている。文学を志すその頃の若者の意気軒昂ぶりがうかがえる、内容の濃いものであった。

牧水は、中でもカールブツセやボードレルを愛唱した。

今から十五年前のこと、そのボードレルの詩の墨書が見つかった。林茂樹沼津牧水会理事長の元へ、友人河野健氏から、瀬戸内海の直島に牧水歌碑が存在し、しかも牧水自筆のボードレルの詩も共に刻されているとの情報がもたらされた。牧水歌碑の調査をしていた我々も知らないものであった。



林理事長は探求心抑え難く早速に直島へ渡る。大正十年に直島を訪れた牧水の足跡を辿り、牧水の案内役だった神官三宅其部氏のご遺族が保管されていた牧水真蹟の短冊に出会うことが出来た。「仏国ボードレル作・日本永井荷風訳」と裏書きされた「字配り・餘の筆」など実に味のある短冊である。

その感動を広く伝えたいとの林理事長の意を汲んだ河野健氏と令兄片岡健夫氏の尽力もあって、記念館での保管、公開をお申し出くだされたご遺族（三宅其部氏の長男親連氏夫人見子氏）のお陰で、誠に珍しく貴重な短冊を沼津市若山牧水記念館で目にする事が可能になった。ありがたいことである。

寄贈された牧水真蹟の短冊に書かれているボードレルの詩は、次のとおりである。

ゆかむがためにゆくものこそ まことの旅人なれ 心は気球の如くにかろく 身は悪運の手より逃れえず なんの故とも知らずして たゞゆかむかなくと叫ぶ



牧水直筆の短冊の贈呈式（平成17年11月20日）
（三宅見子氏と林理事長）



直島の牧水歌碑（平成14年10月11日）
（左から林理事長、河野健氏、片岡健夫氏）

旅についての数ある随想のひとつに、大正五年新潮社刊の『旅とふる郷』でボードレールの詩にふれている。

地圖が欲しい。精巧な大きな日本地圖、そして世界地圖。

斯うした静かな秋の夜に、それが一幅この横の黒い壁にでも懸つてゐたら、ほんたうにどんなに嬉しいだらう。ちいつと見詰めて心あたりの所にそれからそれへと眼を移してゐると、細く突き出たり深く入り込んだりした海岸線など極めて微妙な詩の韻律を追つてゐる様にも思ひなざるゝ時がある。私は前から地圖が好きで、參謀本部の東京郊外邊のものなど幾枚いちり破つたか知れぬ。

目的なしに、單に地圖だけを見て居ることが既に好きなのである。山があり、川があり、海があり、島がある。其處を見此處を見してゐるうちに、單にそれ等ばかりでなく、それ等の間に何處となく流れてゐる人間の悲哀といふ様なものをも感じて来る。數年前父の看護に郷里に歸つてゐた頃、東京からの友人の手紙に、ゴーガンが遙々出かけて行つたタヒチの島といふを見附け出すために随分多

くの地圖を探して辛うじて發見した、とあつた一節など深く身に沁んで讀んだものである。

昨今私は進化論に關する書物を讀んで居る。二十二歳であつたダーウインが探檢船ビーグル號に乗り組んで六年間といふものを世界の各所を經巡つたといふ様なことから、地球の歴史、生物の歴史、人類の歴史、更にまた世界各地に於ける動植物の分布などの事を讀むにつけ、此頃一層地圖を可懐しく思つてゐるのである。

高山に登つて四方の國々、さては遙かな着海等を眺むる時、我等はともすると言ひ難い寂寥悲哀を覺ゆることがある、地圖に見入る心はこれに似通つてゐるかも知れない。

東京に居る人はいま郊外に出て見るが好い。晴れ切つて微かに霞んだ地平線の方に國境の連山が更にかすかなむらさき色を帯びて浮び出てゐるのを見るであらう。そして、久しく忘れてゐた底の胸の動悸を感じるであらう。日はうららかに哀しく、地は行くに従つて優しさに燃え、木といふ木、林といふ林は宛ら各自の魂の煙つてゐるかの様に到るところ

秋の光に煙り立つて居る。

行かむがために行く者こそ、誠の旅人なれ

心は氣球の如くに軽く
身は惡運の手より逃れ得ず、
何の故とも知らずして
たゞ、行かむかな、行かむかなと叫ぶ。

涙のやうなこの歌が今日また深く心にはぐくまれてならぬ。何の故とも知らず、行かむかな、行かむかなと心の奥に悲しまれてならぬ。

以上、限られた紙面で「牧水の旅」の原点二題について記したが、牧水にとつての旅の「あくがれ」を、牧水研究の第一人者伊藤一彦氏は「在」「処」「離れ」であり「心身が何かにひかれてもともと居るべき所を離れてしまよう」の意の由と解説された。

正にそれが牧水の人生であつたことを考えると、「幾山河」と「ボードレール」、そして、父「旅人」と「沼津」。

この縁の不思議を思うばかりである。

(註)「直島の歌碑」と「短冊」についての詳細は、

館報第三十号及び第三十六号に載っている。